

Kokoro – Sensei’s Testament – Parts 28-36 (Natsume Sōseki)

にじゅうはち
二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とかいいました。今ではどんなに変わっているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一どこもかしこも腥いのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳のような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭になりました。しかしKは好いとも悪いともいいません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちょうど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に乗って、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせず黙っている方が多かったのです。私にはそれが考へに耽っているのか、景色に見惚れているのか、もしくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじつとして坐っているものが、Kでなくて、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に乗っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。

すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私はとつぜんかれえりくびうしつかうみなかつおと突然彼の襟頸を後ろからぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうするといっ

てKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちょうど好い、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです。私の疑いはもう一歩前へ出て、その性質を明らかにしました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲斐があったのを嬉しく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけて鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があったので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。

にじゅうく
二十九

「私は思い切って自分の心をKに打ち明けようと思いました。もっともこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨くゆかなかったのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもっていても黙っているのが普通のようなものでした。比較的自由的な空気を呼吸している今のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口に上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅多には話題にならなかったのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話

ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくってもこう堅くなった日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思いついてから、何遍齒がゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一カ所を突き破って、そこから柔らかい空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたがたから見て笑止千万な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかったのです。私にいわせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私がかえって安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫言いました。詫言ながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。――すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちょっと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰ってもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れません。二人は房州の鼻を廻って向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総のそこ一里に騙されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそういいました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入行って行こうと行って、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。

「こんな風にして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂って来るものです。もっとも病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事ができたのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしてもいつもと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行ったのですが、道中たった一つの例外があったのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数もよほど経っていますし、それに私にはそれほど興味のない事ですから、判然とは覚えていませんが、何でもそこは日蓮の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいう言伝えになっているのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至ったのだから、浦には鯛が沢山います。我々は小舟を備って、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかった鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかったものとみえます。彼は鯛よりもかえって日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちょうどそこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行って住持に会ってみるといい出しました。

実をいうと、我々はずいぶん変な服装をしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買って被っていました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなっていました。私は坊さんなどに会うのは止そうといいました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待っているというのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきっと断られるに違いないと思っていました。ところが

坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会ってくれました。その時分の私はKと大分考えが違っていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起きませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮といわれるくらいで、草書が大変上手であったと坊さんがいった時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知っていたのでしょうか。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になってしまいには全く黙ってしまったのです。

たしかその翌る晩の事だと思えますが、二人は宿へ着いて飯を食って、もう寝ようという少し前になってから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私と取り合わなかったのを、快く思っていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠っていますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

さんじゅういち
三十一

「その時私 はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らしすぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういった時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈

んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうとって悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭うったりしたいいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌日からまた普通の行商の態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだらうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば良かったと思ひ出したのです。

実をいうと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれができなかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があったため、思い切ってそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎたといっても、虚栄心が祟ったといっても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になって東京へ帰りました。帰った時は私の気分がまた変わっていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈はほとんど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿っていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうというのです。体力からいけばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

うち つ おく すがた おどろ いろ くろ
宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなっただけでなく、むやみに歩いていたうちに大変瘠せてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったとって賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいとってまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その時だけは愉快的な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

さんじゅうに
三十二

「そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久しぶりで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんとはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合によってはかえって不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかったのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛ててくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する愠歌を奏しました。

ながつ す くがつ なかごろ われわれ がっこう かぎょう しゅつせき
やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならない事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰ったのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。

じゅうがつ ねぼう けっか にほんふく いそ
たしか十月の中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといないと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関に上がって仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。

わたくし はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後 姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室にはいってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといって私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側伝いに向うへ行ってしまうしました。しかしKの室の前に立ち留まって、二言三言内と外とで話をしました。それは先刻の続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆっくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるので、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあったくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張って来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

さんじゅうさん
三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒺藜閣魔を抜けて細い坂路を上って宅へ帰りました。Kの室は空虚でしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思って、急いで自分の室の仕切りを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKは

もう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったので、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大方用事でもできたのだろうとっていました。

私はしばらくそこに坐ったまま書見をしました。宅の中がしんと静まって、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佝びしさが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなったのです。雨はやっと歇ったようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正ができない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かったのです。

足駄でも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出会いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずでした。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kはちよっとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替えました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どちらか路を譲らなければならないのだという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。

さんじゅうし
三十四

「私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくくなりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中ててみろとしまいというのです。その頃の私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓にしているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、そこの区別がちょっと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見做してしかるべきものか、ちょっと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ投げ付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行っただけです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったため

ではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑え付けて、
一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意がある
のではなかろうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが
私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心して
いたのです。恥を搔かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こっちでいく
ら思っても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といっしょ
になるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰って嬉しがっている
人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく
呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰ってしまえばどうかこ
うか落ちつくものだらけの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つ
まり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にもっとも迂遠な愛の実際家だったの
です。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいっしょにいるうちに
は時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は
許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかり
が私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に
気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでい
たのです。

さんじゅうご
三十五

「こんな訳で私 はどちらの方面へ向っても進む事ができずに立ち竦んでいました。身体の
悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、どうしても手足の
動かさない場合がありましよう。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。

その内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多をやるから誰か友達を連れて
来ないかといった事があります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答えたので、奥さん
は驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往來
で会った時挨拶をするくらいのもは多少ありましたが、それらだって決して歌留多などを
取る柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかとい

直なおしましたが、私あいにくも生憎ようきそんな陽気あそな遊びこころもちをする心持いになれないので、好かげんい加減なまへんじな生返事なまへんじをしたなり、打ちうやっておきました。ところが晩ばんになってKと私はとうとうお嬢じょうさんに引ひ張ばり出だされてしまいました。客きやくも誰も来きやくないのに、内々うちうちの小人こにんず数かずだけで取とろうという歌留多かろうたですからすこぶる静しずかなものでした。その上うへこういう遊技ゆうぎをやり付つけないKは、まるで懐手ふところをしている人ひとと同様どうようでした。私はKに一体いったい百一人ひゃくにん一首いっしゆの歌うたを知しっているのかと尋たずねました。Kはよく知らないと答こたえました。私の言葉ことばを聞きいたお嬢おおかたさんは、大方けいべつKを軽蔑けいべつするとでも取とったのでしょ。それから眼めに立たつようにKの加勢かせいをし出だしました。しまいには二人ふたりがほとんど組くみになって私あたに当あたりありさまという有様ありさまになって来あいてました。私は相手次第あいてでは喧嘩けんかを始はじめたかも知れなかつたのです。幸さいわいにKの態度たいどは少しも最初さいしょと変かわりませんでした。彼かれのどこにも得意とくいらしい様子ようすを認めみとなかつた私は、無事ぶじにその場ばを切り上きげる事ができました。

それから二、三日さんにちた経のちった後の事ことでしたらう、奥おくさんとお嬢じょうさんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所ところへ行くといつて宅うちを出でました。Kも私わたくしもまだ学校がっこうの始はじまらない頃ころでしたから、留守居るすいどうよう同様このあとに残のこっていました。私は書物しょもつを読よむのも散歩さんぽに出いるのも厭いやだったので、ただ漠然ばくぜんと火鉢ひばちの縁ふちに肱ひじを載のせて凝じつと顛あごを支さえたなり考かんがえていました。隣となりの室へやにいるKも一向いっこう音おとを立てたませんでした。双方そうほうともいるのだからいなか分わからないくらい静しずかでした。もっともこういう事は、二人ふたりの間柄あいだとして別べつに珍めづしくも何なんともなかつたのですから、私わたしは別段べつだんそれを気きにも留とめませんでした。

十時じゅうじごろ頃ころになって、Kは不意ふいに仕切りの襖しきを開ふすまけて私あと顔かおを見合みあわせました。彼かれは敷居しきいの上うへに立たったまま、私わたしに何なにを考きえていると聞ききました。私はもとより何も考かえていなかつたのです。もし考かえていたとすれば、いつもの通とおりお嬢もんだいさんが問題しだったかも知れません。そのお嬢お嬢さんには無論むろん奥くさんも食くつ付ついていますが、近頃ちかごろではK自身じしんが切り離きはなすべからざる人ひとのように、私の頭あたまの中なかをぐるぐる回めぐって、この問題ふくざつを複雑ふくざつにしているのです。Kと顔かおを見合みあわせた私は、今いままで臆気おぼろげに彼いっしゆを一種じやまの邪魔ごとものいしきの如あきく意こた識わけしていながら、明あきらかにそうと答こたえる訳わけにいかなかつたのです。私は依然いぜんとして彼の顔だまを見て黙だまっていました。するとKの方ほうからつかつかと私の座敷ざしきへ入はいって来きて、私のあたってまいる火鉢まの前まえに坐すわりました。私はすぐ両りょう肱ひじを火鉢ひじの縁ふちから取り除とけて、心持こころもちそれをKの方おへ押おしやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうというのです。私は大方叔母さんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎなのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうと質問するのです。私はなぜだか知らないとい挨拶するより外に仕方ありませんでした。

さんじゅうろく
三十六

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変っているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ疝付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊りといいいましようか、または苦しみの塊りといいいましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策ったと思いました。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかった
たのでしょ。私 は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動
かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぽつりぽつりと自分の心を
打ち明けてゆきます。私は苦しくて堪りませんでした。おそらくその苦しさは、大きな
広告のように、私の顔の上に判然りした字で貼り付けられてあったろうと私は思うのです。
いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を
集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょうか。彼の自白は
最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動
かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どう
しようどうしようという念に絶えず掻き乱されていましてから、細かい点になるとほとんど
耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きまし
た。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じずるようにな
ったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こっちも彼の前に同じ
意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな
利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかったのです。またいう気にも
ならなかったのです。

午食の時、Kと私は向い合せて席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにな
い不味い飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお
嬢さんはいつ帰るのだから分かりませんでした。